

学位論文題名

袁宏道研究

学位論文内容の要旨

本論文は、中国明代の公安派を代表する袁宏道（1568～1610）の文学思想と浄土思想について考察を加え、その特徴について解明を試みたものである。本論文は、第一章「二十世紀袁宏道研究史（二十世紀における袁宏道の研究史）」、第二章「袁宏道の文学思想（袁宏道の文学思想）」、第三章「袁宏道の佛学思想（袁宏道の仏教学思想）」、第四章「袁宏道の佛学代表作《西方合論》（袁宏道の仏教学の代表作『西方合論』）」の四章から構成されている。

第一章 二十世紀袁宏道研究史（二十世紀における袁宏道の研究史）

第一節「中國的有關袁宏道の研究史（中国における袁宏道の研究史）」では、研究史を年代順に三段階に分けている。まず、第一段階として、二十世紀の初めから四十年代の末まで、袁宏道の研究が勃興した時期の論考を紹介し、第二段階として、五十年代から七十年代にかけて、中華人民共和国の成立から文化大革命が終息するまで、政治的影響で袁宏道および公安派の研究が低調となった時期について述べ、第三段階として、八十年代以降、改革開放政策の実施により、古典文学の研究も新しい転換期に入り、袁宏道および公安派の研究が盛んとなった時期の論考について論評している。

第二節「日本的有關袁宏道の研究史（日本における袁宏道の研究史）」では、年代順に二段階に分けて紹介している。まず、第一段階として、陳元賛（1587～1671）の影響を受けた江戸時代の袁宏道研究について、袁宏道の著作の伝来状況および日本の文壇に対する影響について論じ、第二段階として、二十世紀以降の日本における袁宏道の研究状況について論評している。

第二章 袁宏道の文学思想（袁宏道の文学思想）

第一節「袁宏道文学思想的内容、價值與局限（袁宏道の文学思想の内容、価値と限界）」では、袁宏道と公安派の文学思想が、「性霊説」を中心に、文学の発展観、創作論、風格論、鑑賞論、批評論などを含んでいることについて、代表的論考を取り上げて、論評分析し、研究者間に見解の相違があることを確認している。

第二節「袁宏道以“性霊説”爲核心的文學理論及文學創作思想的淵源（袁宏道の性霊説を核心とする文学理論および文学創作思想の淵源）」では、袁宏道の性霊説の淵源について、学术界に存在する六種の説を取り上げて論評している。第一は、李贄の童心説を淵源とする説、第二は儒教・仏道・道教の三教の思想が影響を与えたとする説、第三は李夢陽（1472～1529）、王世貞（1526～1590）など古文辞派の影響を受けたとする説、第四は焦竑（1541～1620）の影響を受けたとする説、第五は王学左派の影響を受けたとする説、第六は「性霊」という言葉の語源を魏晉に遡る説である。この六種の説について、それぞ

れ詳細に分析論評している。

第三節「袁宏道文學思想的影響（袁宏道の文学思想の影響）」では、袁宏道の文学思想が明代の前七子、後七子が作り出した擬古文の風潮に衝撃を与え、「ただ性靈（精神）をのべて、格套（形式）に拘わらない」性靈説が新しい文学的創作の領域を開拓したが、その末流は「奥深く静かで孤独で陰しく」、「自分だけが分かる」という文学主張のもとに、文学作品が難解なものになるという限界があったと論じている。次に、「五四」新文学運動に対する影響を論じ、「五四」新文学運動と袁宏道を代表とする公安派とは少しも関係がないとする説と、「五四」新文学運動が公安派から重要な影響を受けているという説を紹介し、論評を加えている。

第三章 袁宏道の佛學思想（袁宏道の仏教学思想）

第一節「袁宏道佛學思想的形成、發展與轉變探析（袁宏道の仏学思想の形成、發展と変遷に関する分析）」では、袁宏道の仏教思想が禅から浄土へと変化した理由について考察し、変化の背景にある社会的要因と個人的体験について分析を加え、袁宏道が幼少期から、父兄親友の影響を受けて仏教学に興味を覚え、後に李贄の影響を受けていっそう「狂禅」に熱中したが、晩年になると「狂禅」に疑問を生じ、浄土教に帰依した実態を明らかにしている。

第二節「袁宏道詩歌中的佛學思想（袁宏道の詩歌中の仏学思想）」では、第一に袁宏道が禅で詩を論じ、禅と詩の融合を提唱したこと、第二に袁宏道が禅味に富んだ詩を創作し、李贄や陶望齡、焦竑らと共に唱和した詩の中で仏祖高僧を賛美していること、第三に、袁宏道が仏教思想の影響の下で悠遠で淡泊で、俗世を超えた独特の詩歌芸術の風格を形成したことを検証している。

第三節「袁宏道與李贄佛學思想的對比研究（袁宏道と李贄の仏学思想の比較研究）」では、袁宏道と李贄の仏教思想を比較対照し、李贄の仏学思想が仕官への嫌悪と不幸な境遇を通じて形成され、李贄が仏教教理を研究し、生死の問題を探究し、仏学を伝統観念と戦う手段としたのに対し、袁宏道の仏学思想は官界に対する嫌悪という点では李贄と共通するが、病気がちの体質と身内の病死を体験した影響を受けて、「狂禅」から浄土宗へ転向している点で李贄と異なっていると分析している。

第四章 袁宏道の佛學代表作《西方合論》（袁宏道の仏教学の代表作『西方合論』）

第一節「關於袁宏道《西方合論》版本的幾個問題（袁宏道『西方合論』の版本に関するいくつかの問題）」では、『大正蔵』第47巻所収の『西方合論』十巻について、内閣文庫所蔵本（明代泰昌元年刊刻）と和刻本（江戸時代明暦元年刻本）などと校合して誤りを訂正し、校勘記を作成している。そして『西方合論』の版本系統について、内閣文庫本が最古最善の刊本で、和刻本がこれに次ぎ、『大正蔵』本の誤植の殆どが和刻本に由来している実態を明らかにしている。

第二節「從《西方合論》看袁宏道の浄土觀（『西方合論』から見た袁宏道の浄土觀）」では、『西方合論』の構成に順って内容を概括し、袁宏道が、十種の浄土の類型を提示し、浄土が成立する縁起について論じ、西方浄土を説く仏典を分類し、浄土に関する六種の学説を総括し、西方極楽世界の実在を論じて浄土信仰を勧め、五つの実践的修行法を説き、浄土への往生を追求するよう強調し、十種の誤った見解を批判し、十種の具体的な浄土宗の修行法を紹介し、西方極楽世界に関する十の疑問に答えている、と総括している。『西方合論』の特徴としては、西方浄土への往生を説いて「狂禅」に反対していること、禅浄

双修を主張していること、華嚴宗等の影響を受けて『西方合論』では分類数と構成の基本として十を用いていることなどを提示し、仏教史上の重要著作であると論じている。巻末に附録として袁宏道の自序『西方合論引』訳注と参考文献一覧を附している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 佐 藤 鍊太郎

副 査 教 授 須 藤 洋 一

副 査 教 授 藤 井 教 公

学 位 論 文 題 名

袁宏道研究

本論文は、中国明代の公安派を代表する袁宏道（1568～1610）について、その文学思想と浄土思想について検証し、中国および日本における研究史を踏まえた上で、袁宏道が提唱した「性霊説」および浄土観の由来と背景について、同時代の李贄（1527～1602）らと比較対照しつつ、考察を加え、その文学思想と浄土思想の特徴について解明を試みたものである。

本論文は、第一章「二十世紀における袁宏道の研究史」、第二章「袁宏道の文学思想」、第三章「袁宏道の仏教学思想」、第四章「袁宏道の仏教学の代表作『西方合論』」の四章から構成されている。

袁宏道は明代の著名な文学者であると同時に明末の在家の仏教信者でもある。しかし、これまで袁宏道の仏教学に関する研究は手薄であったと言わざるを得ない。本論文は袁宏道の思想的経歴およびその文学的主張に緻密な考察を加えているのみならず、従来、研究が手薄であった袁宏道の仏教思想についても考察を加え、その文学思想と仏教思想の関連性を検証することに成功している。本論文によって、袁宏道が禅宗や浄土宗の教義を踏まえた詩文を撰述し、浄土教を宣揚するために『西方合論』を撰述した実態が明らかにされた点は高く評価できる。また、中国浄土教の発展史上、重要な地位を占める『西方合論』について、これまでテキスト・クリティックも、全面的な研究もなされていなかった。本論文では『大正蔵』所収のテキストについて緻密な校勘を実施して欠陥を指摘し、本文を確定している。これは特に高く評価するに値する点である。

本論文は、今後の袁宏道研究および『西方合論』研究に裨益する所が大きく、明末以降の文学史の研究、仏教史の研究の欠落部分を補うものとして、評価できる。なお、本論文の第一章第一節および第三章第一節・第三節の主要な内容は、既に張岱著『二十世紀袁宏道研究評述及其佛学思想』（北京、遠方出版社2010年10月刊）の第一章「二十世紀袁宏道研究評述」と第二章「袁宏道的佛学思想」および附録「李贄与袁宏道佛学思想的对比研究」（『首都師範大学学報』2004 4 年6期原載）として公表済みである。また、第四章第一節は張岱「袁宏道『西方合論』の版本について」（『中国哲学』第37号、1009年11月）の中国語版である。

本審査委員会は、以上の審査結果に基づき、全員一致して本申請論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであると判定した。